

三利波難

日た來の號ツィレィ



難波利三

文藝春秋

フルティツシユ号の来た日

難波利三（なんば・としぞう）

1936（昭和11）年島根県生まれ。関西外国語大学中退。72年「地蟲」で第40回オール讀物新人賞を受賞、直木賞候補となる。73年「雑魚の棲む路地」、75年「イルティッシュ号の来た日」「天を突く喇叭」、78年「大阪希望館」でそれぞれ直木賞候補となり、84年「てんのじ村」で第91回直木賞を受賞。著書に「天皇の座布団」などがある。

イルティッシュ号の来た日

昭和五十九年十月三十日 第一刷

定価 一二〇〇円

著者 難波利三

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話（〇三）二六五・二二二一

印刷 凸版印刷

製本所 和田製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

イルティッシュ号の来た日／目次

天を突く喇叭

5

泥絵具の街

95

賑やかな病棟

139

イルティッシュ号の来た日

179

あとがき

250

装
幀
司
修

イルティッシュ号の来た日

天^{てん}を突^つく
喇叭^{らっぱ}

一

村境の峠の上まで、見送りの人達は日の丸の小旗を振りながら登って来た。

頭を丸刈りにして縞の着物の上から紋付きの羽織を着、袴の尻を端折って股引を覗かせた源次を先頭に、同様の恰好をした小学校校長がすぐ後に続き、三十人ほどの子供達と源次の肉親、それに顔見知りの村人が数名加わっている。赤茶けた落葉が山路に積もり、人々の歩みにつれて乾いた音を立てる。黒足袋に草鞋履きの源次の足元に、網目のように透けた櫟の葉が二、三枚まつわりついた。

針葉樹の繁る個所だけを黒々と残して、山はそろそろ冬支度にかかっている。谷底から吹き上げる風が小枝を鳴らし、峠の茶屋の前の僅かな広場をかき乱して枯葉や砂ぼこりを舞い立てる。風は冷たいが坂を登って来た人々の顔は上気して、微かに湯気を昇らせた。

「それじゃ、ここでお別れとしようかの」

校長が手拭いで首筋をこすりながら言う。村から入營して行く者は、この峠の茶店まで見送る慣わしになっている。源次も尋常小学校のころ、何度か見送りに来た憶えがあった。

校長に促されて源次は地蔵の傍の小石に上がり、三度目の別れの挨拶を陳べた。最初は校庭の

朝礼台の上から、二度目は山道にさしかかる土橋の際にある牛の爪切り場で挨拶した。これも決まりになっていて、入営する者はいずれもこの三個所で挨拶を陳べなければならぬ。朝礼台では意気込みを示すためできるだけ長く喋り、爪切り場では、これより急勾配の山道にさしかかるので、どうぞお引きとり下さいと丁寧な辞退する。無論、見送り人達は引き返したりはせず、高らかに万歳を三唱して応え、再び列を作って峠まで送ってくるのである。

「悪路をお見送り下さり、有難う御座いました。これより、南田源次、浜田連隊に入隊し、微力ながら御国のために尽くす覚悟であります。わざわざのお見送り、誠に有難う御座いました。元氣に行つて参ります」

袴の裾を直し、石の上に直立して源次は挨拶した。皆は旗を振り、万歳を唱える。礼を繰り返す源次の傍に、母が近寄り、竹の皮に包んだ握り飯を手渡した。

「峠にや、充分氣をつけや」

涙声で言い、鼻水を吸り上げる。父と兄の加一も寄つて来て、両側から源次の肩を叩いて励ました。

峠から七曲がりの坂を下りると、温泉津港に出る。そこから船で浜田へ向かうのである。山陰線は今市（現在の出雲市）までしか開通しておらず、石見地方の人々にとって唯一の交通機関は「蒸氣」と呼ぶ客船であつた。

源次は再び尻からげして歩き始めた。谷を挟んで、道が大きく湾曲している所まで来て振り返ると、峠の上の見送り人達がいっせいに旗を振り、口元に手を当てて声を張り上げている姿が見えた。前方に身を乗り出した子供達の、色とりどりの短めの着物の裾が、忙しなく風にはためく。たて続けに頭を下げて応え、源次は母が渡してくれた弁当包みを背中に括り直し、勢いよく下つ

て行った。

窯業場の裏の竹藪たけやぶを抜けて近道し、温泉津の街へ入ると汽笛が聞こえた。時刻から判断して、今市方面へ向かう下りの蒸気の出航らしい。源次の乗る船は浜田、下関を経由して大阪へ行く上り便である。日本海は時化しける日が多く、船便は当てにならない。もし欠航なら、その足で浜田まで十里の道を歩くつもりでいたが、汽笛を聞いて源次はひと安心した。

温泉津は漁業と温泉の街である。湯治客で賑わう通りを真っ直ぐ下ると港に出る。沖合の空は鈍色にびいろに狭まって雲行きが怪しいが、海は凪なぎ、棧橋いかりの杭の辺りで僅かに波立った。

杉皮葺すぎわきの船宿に入り、源次は汚れた草鞋を履き換えた。沖を眺めながら茶を啜すすっていると、半纏姿はんてんざの宿の主が筆と帳面あはじを持って名前を訊きに現われた。

「上りの便、出ますかいね」

源次が念押しすると、主はへーと大声で応え、

「入営いんえいしんさるだな」

と、丸刈りの頭に目をやる。源次が頷くのを見て、座敷でくつろいでいた客達が口々に、おめでとうと言ひ出した。

「御国のために、頑張りんさい」

「二十一連隊は、そりゃ強いだけに」

鳥打ち帽子を被って傍に唐草模様の風呂敷包みを置いた男が、立ち上がって万歳を叫ぶと、一同が唱和する。源次は素早く起立して受けた。宿の主も筆と帳面を握ったまま、両手をあげていた。

船を待つ間、男達は源次をとり囲み、日露戦争のとき奉天で活躍した二十一連隊の話を、唾つばを

飛ばしながら喋って聞かせた。

やがて湾の入口で上りの船が合図の汽笛を鳴らした。客達は荷物を両手に下げ、氣忙しく棧橋へ向かう。源次も一同に従って船宿を出た。長い煙突から黒煙をなびかせながら、客船は速力を弛めて方向を変え、岸壁に横づけになった。

三等船室は畳敷きの大広間である。乗り込んだ客達は手早く荷物の整理をつけ、火鉢を囲んで車座になって喋り出す者、煙草盆を膝元に引き寄せて煙管を咥える者、片隅に陣取って早々と毛布を被り横たわる者などで、ひとわたり騒々しい。源次は入口近くで胡座を組み、手垢で汚れた板壁に背中をもたせかけた。

出航の汽笛が鳴り、腹に響く機関の音が激しさを増すと、船は動き始めた。船底の三等船室には窓がなく、外の景色は見えない。源次は羽織を脱いで弁当包みの上に置き、鉄の階段を昇った。デッキに出ると潮風が着物を乱し、耳朶が痛くなるほど冷たい。それでもしばらく、源次は手摺を握ったまま立ちつくした。遠ざかる街並みを眺めていると、次第に心細さが込み上げた。

尋常小学校を出て以来、源次は父親と加一について木挽の見習いをしてきた。連日、深山に分け入り、鋸を挽き、斧をふるって杉、松、檜を伐採し、肉親以外にはめったに村人達とさえも顔を合わすことのない暮らした。

その間、源次が村を出たのは僅かに数回だけである。五里ほど離れた大田の町へ、春秋の彼岸に柿やミカンの苗木を求めに山越えして出向いたことと、牛市の立つ日の前夜から泊まりがけで、牛を曳いて行ったことぐらいだった。

今年の五月、徴兵検査を受けるために浜田まで行ったのが、これまでに最も遠方へ出かけた経験で、そのときは海が荒れて船が欠航したため、加一が道案内に同行し、十里の道を提灯を頼り

に夜通し歩き続けた。五尺七寸、十六貫の源次は、五尺二寸十二貫の規準を優に上回って甲種合格となり、軍医は背中をどやしつけ、

「ほればれする駄だのう。こりゃ、弾が当たっても、はじめてしまうで」

と、褒めそやした。帰日も船便の見込みが立たず、二人は歩くことになったが、甲種合格がうれしく、源次はさほど苦にならなかった。

「軍隊ちゅうところは、万重要領のええ奴が得するところだぞ」

昨晚、父と加一は交代で源次の頭を刈りながら、そう言っただけで教えた。いよいよ入営かと思うと、源次の胸に漠然とした不安がよぎる。

「お前は図体ばかり大きいて、ちっと、ばーっとしとるけに、損せんように立ち回らにゃの。ま、それでも、わしゃ乙だったが、お前は甲種だぞ、連隊生活も愉しかろうてや」

源次の顔色を見てとって、加一がバリカンを使いながら励ました。母は余分に蠟燭を二本立て、土間に落ちた髪を丁寧^{ていねい}に拾い集めた。

「戦地へ行くわけでもあるまいに」

父がたしなめたが、母は無言で和紙に包み、神棚^{かみだな}にしまい込んだ。

つい昨夜のそんな光景を、源次は遠い日の出来事のように思い出した。船は入江を出て、陸地を左手に見ながら進む。陽の翳^{かげ}った山並みは濃紫の輪郭を鋭くし、すぐ近くに迫って見えた。

源次は船室に戻り、羽織を着た。客のほとんどは横たわり、小声を出しているのは片隅で花札をいじっている職人風の男達だけである。空いている火鉢を引き寄せ、源次は冷えた手をかざした。震動につれ、心細さが小刻みに深まった。

その日の夕方、船は浜田の瀬戸ヶ島に入港した。そこから山道を越えて港町へ入り、源次は新

町にある宿屋に一泊し、翌朝、歩兵第二十一連隊に入営した。晩秋だというのに粉雪がちらついて町を白く装い、営門前の道路にはいくつもの草鞋の跡がついていた。明治四十三年十一月末のことである。

二

連隊は宇鬼山のふもとに広がる十四町五反余りの広大な面積を占め、営庭を囲んで本部建物、第一、第二、第三大隊の兵舎が建っている。周りには雨天体操場、馬屋、彈藥庫、工場、炊事場などの附属建造物があり、さらに浴場、洗面所、風紀衛兵所、営倉、面会所、酒保、集会所、医务室などが設^してある。第三大隊兵舎の南側には、夕ベヶ岡という名の小山を中央に据えた練兵場が広がっていた。

第一中隊から第四中隊までは第一大隊に属し、以下、第五中隊から第八中隊までが第二大隊、第九中隊から第十二中隊は第三大隊という編制である。

源次は第六中隊第六班に配属された。同じ方言を話す石見地方出身者の集まりのせいか、それほど堅苦しさは感じなかった。

連隊長は陸軍歩兵大佐——大沢月峰、第一大隊長は岡欽一少佐、第二大隊長——重松延高少佐、第三大隊長——恵利虎造少佐、源次の属している第六中隊長は川崎享一大尉である。入営するとすぐ、軍人勅諭と同時に、これら上官の名前を憶えさせられた。

源次は初めて服というものを着、靴を履いた。着物に比べ、首の周りを締めつけられるようで窮屈に思える。他の者も同様らしく、それぞれ首をひねったり、腕を振り回したりして落ち着かない様子だった。

支給された被服は夏襦袢袴下、夏衣袴、夏外套、冬襦袢袴下、冬作業衣袴、外套の順で寝台の傍の棚に整頓して重ね、その上に背囊と軍帽を載せ、横に手箱と飯盒、前方に雑囊、水筒、軍靴、手拭いを吊しておく。乱雑になっていると班長の叱咤が飛ぶ。家での気ままな日常に比べ、整理整頓はかなり煩わしいことだった。

源次達の一日は五時半の起床喇叭で起こされた。整列して点呼を受け、食事喇叭の鳴る一時間の間に便所、洗面、掃除などをすませる。朝食後は営庭で隊列の組み方や銃の操作を教え込まれ、午後も同様の教練が五時まで続く。そのあと銃や靴の手入れと衣類の洗濯をし、ようやく夕食にありつく。

食後二時間ほどが休養時間であるが、初年兵には到底その余裕はなく、上官や二年兵の靴磨き、洗濯に忙殺され、風呂へ行く間さえろくにとれない。どうにか片づけて風呂にありつけたとしても、館湯のように濁って垢の固まりを浮かべた湯を見ると、入る気が失せてしまう。忙しく追い立てられる一日が終わり、床に就くと、いくつもの押し殺した溜息が洩れた。

第一期検閲がすんで間もなく、源次は中隊事務室に呼ばれた。部屋へ入ると、川崎中隊長と、中隊長代理の吉村中尉が待ち構えていた。敬礼する源次の正面へ中隊長が歩み出、

「南田二等兵、貴様に第六中隊の喇叭手を命ずる」と、甲高く言い放つ。

「はっ」

源次は緊張して応えた。

「よいか、貴様も承知していることと思うが、わが二十一連隊の喇叭手からは、かの勇士、木口小平が生まれている。喇叭手に選ばれたことを栄誉と心得、奮起して木口小平に負けぬほどの喇

喇叭になるよう努めよ」

中隊長は力強く言い聞かせる。中隊長代理も寄って来て、

「各中隊に喇叭手は一名ずつだ。貴様はその名誉ある一人に選ばれたのだぞ。よろこべ」と、肩を叩く。

「有難うございます」

源次は上擦った声を出した。

どうして自分が喇叭手に選ばれたのか、源次には判らなかった。喇叭などこれまで手にしたこととさえない。ただ思い当たることは、中隊の中では一、二番に大きい体軀と、身体検査のときの肺活量が四千八百あり、男子平均の三千五百を越えていたことぐらいである。それに齒も丈夫だった。音感の検査を受けたわけではなく、自分が選ばれた理由としては、それ以外には考えられない。喇叭を吹くのに音楽的な才能など必要ではなく、頑健な躰さえあればよいのだろうと源次は思った。

木口小平の話は知っている。責任感の強い、軍人の模範として、敵の弾に当たりましたが、死んでも喇叭を口から離しませんでしたと、子供のころから何度となく聞かされた。戦史に残る立派な兵士だと教え込まれた。

その人と同じ喇叭手に選ばれたといっても、源次には感激などなかった。隔たりが大きすぎて身近に感じられず、光榮なことだとは判っているが、はたして喇叭など吹けるものかどうか、そのことのほうが心配だった。

翌日、喇叭長からの伝令があり、連隊内の喇叭手全員が集合することになった。午後一時、集会所には六十余名が揃った。喇叭手は各中隊一名ずつと聞かされていたので、源次は人数の多い